Title	摂関期官人統制における慣習的処罰法： 「恐懼」「除籍」による処罰を中心に
Sub Title	A study on the disciplinary custom for the bureaucrat in the "Sekkan" (摂関) period
Author	長谷山, 彰(Haseyama, Akira)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1989
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.62, No.5 (1989. 5) ,p.58- 104
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19890528-0058

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

撰関期官人統制における慣習的処罰法

——「恐懼」「除籍」による処罰を中心に——

長谷山 彰

- 一、はじめに
- 二、「恐懼」の刑罰的性格
- 三、「恐懼」による処罰の態様
- 四、「恐懼」と律令法に基づく処罰
- 五、慣習的処罰法の出現と撰関期における政治機構の変化
- 六、おわりに

一、はじめに

律令国家を支える重要な柱の一つとして強力な官僚機構の存在が挙げられるが、さらにその組織を維持統制するところが当時の支配層にとって必須の課題であったことはここに改めて論ずるまでもあるまい。

そのために律令法は『選叙令』『考課令』『禄令』等において官人の出身、勤務評定、身分の保障・変更等について

規定する一方、『名例律』『職制律』等に官人の職務上の違失に対する罰則を定めてその職務の遂行を厳格ならしめ、これによって行政の円滑な運営を確保せんと図っている。とりわけ『職制律』を中心とする処罰法の規定は詳細を究め、官人の日常的な業務のほとんど全ての分野に亘ってその準則を示しているといっても過言ではない。また官人に職務上の違失があった場合、或いは一般の犯罪を引起した場合には公民に対する処罰とは異なる手続によって処断されるが、それについても『獄令』等に規定が存在する。

しかしながら、これら官人統制に関する律令法の規定は詳細のあまり煩瑣の感を免れず、またその罰則にしても違失の程度に比してやや重きにすぎるとの嫌いがなきにしもあらずである。それ故に、律令制定当初の奈良時代から、ややもすると官人の違失に対して、律令の法文に拘らない簡便な処分が行なわれる傾向が存在していたが、さらに進んで平安時代に入ると、律令法の原則とは別に新たに官人統制に関する一種の法的慣習が形成されていった。

筆者は先に撰関時代において、官人の違失に対して「怠状・過状」の提出を科し、この処分を受けた者は朝参を停止されて謹慎しなければならず、後日これを返給することで罪を免じるという処断手続が行なわれていたことをとりあげ、これが律令法を変改する法慣習として確立していったことを使庁における裁判手続との関連で論じたが、⁽¹⁾官人の違失に対する処罰法としては「怠状・過状」の徴収以外にもいくつかのものがあげられる。例えば、「除籍」、「恐懼」、「停任」等は参内の停止、官職の停止等の効果をもつ点で、「怠状・過状」の徴収と共通の性格を有しており、これらのものを官人統制に関する法的慣例として総合的に把握することが可能である。また、「除籍」、「恐懼」等の処罰法が撰関期における政治機構の変化に対応して新たに生み出されたものであることも注目される点である。

そこで、本稿では特に「恐懼」を中心にしながら右の慣習的処罰法について検討を加え、撰関期における官人統制の側面を明らかにすべく試みることにしたい。

二、「恐懼」の刑罰的性格

「恐懼」は本来、恐れかしくこまるの意の熟語であり、その用法は奈良時代から既に行なわれている。『続日本紀』養老五年二月甲午条に、『朕心恐懼日夜不休』とあり、ここでは天皇が神に対して恐れかしくこまる気持を表明している。同意の史料はこの後も奈良平安時代を通じてしばしば見受けられるが、一方、撰関期に至ると右の用法と並行して、「恐懼」が一定の法的効果を有するいわば法律用語として用いられるようになる。一例をあげると、『小右記』長元五年十一月二十三日条に、

（前略）去夜因侍從信家語、六位藏人等不向中将五節所、（中略）関白聞斬事腹立、勘責件六位等、恐懼退出、（後略）とあり、五節所に参上せざる六位藏人等が関白の勘責を蒙り、恐懼退出したことが知られる。無論、これだけでは「恐懼」が必ずしも一定の処断であるとはいえず、自発的な謹慎に過ぎないとも受取れるが、他の史料によれば、「仰恐」「可恐々」「可恐申」「處恐懼」等の表現がみられ、「恐懼」が上から命ぜられるものとして一種の科刑化していたことが知られる。早い例では、『小右記』天元五年四月三十日条に、

（前略）又禊祭日、納言等称障不参斎院、就中民部卿文範・左衛門督重光、其障無所抛、文範申障在近衛府使處、重光禊日前日仍可召問申可参入之由、當日付權使申障由也之由被仰左府、重光参入、雖有所避申、被仰可恐之状了（後略）、

とあり、禊祭日に故なき障りを申し立てて参上せざる源重光に対して、本人の弁明にもかかわらず、「恐懼」が命じられている。同じく『小右記』寛和元年正月七日条には、元日の節会において宮殿の壁代が三間ばかりも剝落したために天皇が責任者の勘問を命じたことがみえ、その結果については、

可之仍不慥其事之由、有被勘仰藏人信理、雖有所避申、被仰可恐申之由、

とあって、やはり、当事者の弁明を退けて「恐懼」を命じている。また、『左経記』治安元年六月二十四日条には、

殿上有起請、当番人不参、一度恐、二度除籍、

とあり、殿上人が当番を欠怠した場合、「恐懼」、「除籍」に処すべきことが定められている。「除籍」については後に触れるが、要するに殿上人の籍簡を削除するというものであって科刑の性格を有していることは間違いない。従って、これと並んで挙げられている「恐懼」も単なる自発的服罪の表明に留まるものではなく、違失に対する処罰として他律的に科せられるものであったと考えられよう。

さらに注目すべきは「恐懼」の原免も上長の意志によっていることである。『権記』長保二年十二月二十一日条には、

前内舍人方正・文章生孝行、臨時祭調業役闕意・有^(日之)来恐申、今日依仰免之、

とあり、臨時祭の調業の役を欠怠して「恐懼」に処せられていた前内舍人等をこの日優免している。また『左経記』万寿三年九月十九日条には、

右少弁家経、史信重被免恐、当年位禄多、依去年正月七日不参輩、前日被召問所恐申也

とあり、正月の節会不参により、先に「恐懼」を命じていた右少弁等を免じている。

「恐懼」の原免についていえば、前掲の『小右記』寛和元年正月七日条の例でも、これに続く正月九日条の記事に、
参内、奏免信理勘事、即召遣了、

とあり、藏人を優免したことが知られる。ただ、先の七日条では「可恐申」としていたのが、ここでは「勘事」と表現されていることが気に懸かるが、これについては撰関期に「恐懼」と同様の効果をもつ措置を「勘事」と称する史料が多く見出されることを指摘したい。恐らく官人がその違失によって勘責を蒙り恐懼謹慎することが刑罰化するに及んで、この処分手続を全体として「勘事」と呼ぶようになったものであろう。また処分による効果の点でも両者の間に差異が認められないこともあり、本稿では、個々の事例において特に異質の処分を示す明証がない限り、「恐懼」

と「勘事」を同一のものとして扱うことにする。

そこで「恐懼」・「勘事」の法的効果であるが、第一に参内を停止され、祭事等の公的行事にも参加しえず、謹慎すべきことがあげられる。『小右記』永祚元年九月八日条に、

昨日奉幣使宰相大藏卿時光・春宮権大夫誠信申故障、其替示之上侍臣云々、

とあり、二人の参議が故障を申し立てて奉幣使の任を逃れたことがみえるが、続いて同九月九日条には、

一昨日闕奉幣使参議二人被処勘事、不知其事、大藏卿参入、奉仰退出已了。

とあり、件の兩名が「勘事」に処せられたことが知られる。しかも処分を知らずに参入した大藏卿が命によって退出しているから、「勘事」には参内停止の効果があると考えられよう。また、『小右記』長徳二年十二月十四日条には、

左右大臣以下参春宮、式部大輔輔正一人（不_レ参、依公家勘事歟、

とあり、式部大輔菅原輔正の春宮への不参について公家勘事を理由としてあげている。

次に、公的行事への参加禁止であるが、『西宮記』卷十裏書所引『三代御記』逸文、延喜十六年正月十六日条に、
出南殿云々。内膳宮人等有勘事不供奉。有典膳一人。即問例事。申云。番長有供進之例。仍今日番長等与典膳持御台云々。

とあって、内膳宮人等が「勘事」に処せられている身であるために供膳に奉仕できず、番長を以てその替りに充てたことがみえ、さらに『小右記』長和五年五月五日条には、手結行事について、

攝政隨身番長公時、去年依攝政勘事不供奉、

とあって、近衛番長が攝政によって勘事に処せられたため、手結の射手として供奉できなかったことが知られる。

ところで、参内停止、公事参加の禁止という処分態様から当然に導き出されることであるが、官人が「恐懼」・「勘事」に処せられた場合、本来の職務の執行に携わることもかなわなかったと思われる。『小右記』長元々年十一月九日条によれば、不堪佃田荒奏に際して、右大史小野奉政が解文の配列を取り違えたため勘責を蒙ったが、その処分に

ついては

余云、須依件事勘責奉政、然而漸及歳暮公事繁多、殊優也、

とあり、『小右記』の作者藤原実資は上卿としての立場から、年の暮れの諸事繁多な折柄、(右大史を欠くのは得策ではないと判断して)これを免じている。同じく『小右記』治安三年五月十日条では諸国に相撲人の貢上を命ずる官符の作成者たる左中弁が別件で勘責を蒙ったのであるが、

件官符事前日仰左中弁重尹、而依東宮不恪勤事被勘責、然而可令成彼以前官符由仰遣已了、即有可成由之報、

とあって、官符の作成は勘責以前に行なわれたものであるから、成立に支障はないとしている。右の二例は、いずれも勘責を蒙り、「勘事」に処せられた場合には本務に従事し難いことを間接的に窺わせるものであるが、次の史料は事実をより明確に示している。即ち、『日本紀略』康保元年二月十五日条に

宣旨。檢非違使之政。以_レ法家官人_ニ為_レ宗。而右衛門志赤染時用依_レ勘事_ニ不_レ從事。宜_以右少史日下部豊金_ニ令_レ參_レ政庭者。

とあり、これによれば檢非違使庁の庁政に携わるべき道志の赤染時用が「勘事」に処せられていて職務に従う事ができないうために、右少史日下部豊金を以て替りとすべく宣旨の下されたことが知られる。

以上によって、「恐懼」・「勘事」は官人の違失に対する処罰の一方法として行なわれ、参内の停止、公事参加・公務従事の停止という法的効果を及ぼしていたことが一応確かめ得たと思う。

尚、「恐懼」・「勘事」は後日の処分として行なわれる例も無論数多く存在するが、もし違反のあった現場で咎めを受け、「恐懼」・「勘事」に処せられた場合には直ちに朝廷から退出する習わしであった。『小右記』正暦元年十一月二十六日条には作者実資が新嘗祭の欠怠によって「恐懼」に処せられたものの、その命が内裏よりの通常の退出間際に伝えられたことを不審とする感想が述べられている。同史料は「恐懼」・「勘事」の同質性にも関係する興味深い史料なので、日乗に沿ってやや詳しく処分の経過を辿ってみたい。

まず、正暦元年十一月二十四日条に、

依召参内、左頭中将仰云、新嘗祭不参入之由有被問仰者、依穢兼日奉假文了、仍不能罷着之由令奏了、宰相待従同有被問事、仍兩人相共退出、

とあり、実資と参議藤原誠信が新嘗祭への不参内によって勘問を受けたのが事の発端である。実資は触穢によって参上し得ざる事を先に届出していたので、その旨を奏上したのであるが、ともかくも咎めを受ける可能性があるととして誠信と共に内裏より退出している。ついで同二十六日条には、

依召参内、今日臨時祭、其儀如例、（中略）事了退出之間、右頭中将仰云、不参神態可恐申者、待従宰相同蒙公責、仍退出了、可有勘責者、先可奉其趣、而臨退出時今有此仰、為恠、

とある。この日実資は召により参内し、臨時祭の儀に列しているから、この時点では、前日の勘問は処分はまだ及ばなかったと自身で理解していたようである。ところが、儀式が終了して退出せんとする時に至って、神事欠怠により「可_三恐申_二」という命が伝えられたのである。これに対して実資は勘責ある時はその日先ず以て処分を行なうべきであって、もはや退出せんとする際に及んでの「恐懼」の仰せは奇怪であるとしている。実資の不審の念は、「恐懼」に処せられた場合、早々に内より退出しなければならぬという原則を背景にしてこそ生じるものであろう。いずれにしても釈然としない思いを抱きながら実資は誠信と共に謹慎することになるが、月の改まった十二月七日条には拾遺相公使陳泰朝臣示送云、日者密々修行、昨日帰来、公家勘事案内不審無極、有所聞否者、未承案内之由、答報已了、とあり、誠信から自分達に対する「公家勘事」を不審極まりなしとし、その後の状況を問い合わせてきている。さらに同八日条には

皇太后宮於東三条被行御八講云々、（中略）依公家恐不参入、公卿勘事自非重事、更不及十日、而已及十余日、傾奇不少、とあり、この日、皇太后宮御八講が催されたにもかかわらず、実資は「公家恐」を理由として参入しなかったことが

知られる。しかもこの「恐懼」が自発的なものではない証拠に、公卿に対する勘事は重罰にはあらず、期間も十日を越えないのが通例であるのに、自分の場合、既に十余日に及んでいることは極めて奇怪であるとしている。最後にこの一件の結末については十二月十三日条に、

内豎米称左頭中将仰云、只今可参入者、晚頭参内、(中略)今日召、是被免勘事云々、無殊事、及十余日猶可奇者也、

とあり、実資は勘事を免ぜられているが、ここでも、殊更の違失でもないのに勘事が十日以上にわたったことに不満をみせている。

右の史料で見逃し得ないのは実資のいう「勘事」は十日を越えず、という原則である。これが事実ならば「恐懼・「勘事」は期間の定めを有する点で、科刑としてかなり完成されたものであったと認め得ることになるが、これについては今少し他の史料にあたってみなくてはなるまい。また期間の定めのみならず、「恐懼」・「勘事」がいかなる場合に、いかなる人物を対象として科せられていたのかも問題である。そこで、次に章を改めてこれらの点について検討してみることにしたい。

三、「恐懼」による処罰の態様

撰関期において「恐懼」・「勘事」が官人の違失に対する処罰の一形態として行なわれていたことはほぼ明らかになつたと思われるが、さらに「恐懼」・「勘事」による処罰の内容を詳細に知る必要がある。

そこで、右の目的に資するため、撰関期の史料の中で比較的長期に亘って記載のある記録類から、「恐懼」・「勘事」の例を抽出し、これを年代順に配列したものが表Ⅰである。表中の備考欄に「原免記事」「優免記事」とだけあり、日付の無いものは「恐懼」・「勘事」に処せられた折の記事が見当たらず、上の年月日欄に記された日乗に優免の記事

のみが残されているものである。また、出典欄の略号が示すところは以下の通りである。

貞	『貞信公記』（『大日本古記録』）	三	『類聚三代格』（『新訂増補国史大系』）
御	『御堂関白記』（『大日本古記録』）	政	『政事要略』（『新訂増補国史大系』）
小	『小右記』（『大日本古記録』）	実	『日本三代実録』（『新訂増補国史大系』）
左	『左経記』（『増補史料大成』）	扶	『扶桑略記』（『新訂増補国史大系』）
権	『権記』（『増補史料大成』）	符	『類聚符宣抄』（『新訂増補国史大系』）
世	『本朝世紀』（『新訂増補国史大系』）	春	『春記』（『増補史料大成』）
紀	『日本紀略』（『新訂増補国史大系』）		
西	『西宮記』（『改定史籍集覧』）		

尚、表中には「恐懼」・「勘事」の外に、少数ではあるが、「勘責」・「勘当」とする例が含まれているが、これらについては多少の説明を要する。

「勘当」は本来、「恐懼」・「勘事」の契機となる問罪・叱責の表現であって、父が子を叱責するなど、純然たる私事にもしばしば用いられている。また公事に関わる「勘当」であっても、必ずしもその場での懲戒以上の処分を伴うものではない。従って、これらの全てを官人に対する処罰法としての「恐懼」・「勘事」と同一次元で取扱うことは適切ではないが、中には「勘当」とあっても内容的にみて、明らかに処罰の一形態として行なわれたことが推測できるものが存在している。例えば、「勘当」を受けて退出し、後日、優免に浴した記事がみえるものなどは、その場限りの単なる叱責とは異なり、「恐懼」・「勘事」と同様の効果をもっていたと考えられるので、こうした例については特に表Ⅰに掲げることにしたものである。

「勘責」についても事情はほぼ同様である。例えば、③『小右記』長和二年七月十日条は

藏人敦親有誹謗之聞、被勘其由、令處勘責給云々、

としており、他人を誹謗するの聞こえあり、という内容からすれば、単なる戒めかとも思われるが、「事情を勘問した上で勘責に処した」という表現から推すと、やはり、「恐懼」・「勘事」と同様の処分が行なわれたと思われる。このほかにも『小右記』では「勘責」と「勘事」は表現は異なっても同一の意味で使用している例が多く見受けられる。前章末に引いた正暦元年十一月二十四日条をはじめとする一連の記事で、実資は新嘗祭欠怠によって自らが蒙った処分について、「恐」・「勘責」・「勘事」を混用している。また、『小右記』治安三年正月七日条でも、白馬御覧の運営に過失のあった大外記を「處勘責」したとあるが、正月十一日の優免記事ではこれを「免勘事」としている。

要するに、「勘事」の表現は比較的早くからその史料があり、その後も撰関期を通じて一貫して用いられているから、むしろ、参内停止等の効果をもつ処罰を指す表現としては「勘事」が一般的であって、「勘当」・「勘責」・「恐懼」などは当初、それぞれ処罰の契機、或いは結果としての行為の表現にすぎなかったものが、次第にそれ自体、処罰の態様を指すものとして使用されはじめたものであろう。

さて、右の事実を踏まえた上で表Iを通覧してみると、次の様な知見が得られる。まず、「恐懼」・「勘事」の原因になった行為としては、

(イ)元日節会、白馬節会、踏歌、射場始等、朝廷で催される公的行事への不参、及び新嘗祭、臨時祭等の祭事の欠怠、
(ロ)宣旨発給手続の遺漏や奏報作成上の誤脱、不堪佃田奏における手順の失錯などの公務遂行上の違反。

以上の二種が大半であり、これに飲酒濫行や他人を誹謗する等の無礼の言動、従者の濫行に対する監督不行届が加わっている。

次に、「恐懼」・「勘事」の対象となった人物についてその官職をみると以下の如くである（兼官のある場合、重複が生じるが、処罰に関わる本人の職務を知る参考にもなるので、そのままに掲げた）。

(イ)親王、内大臣、大納言、中納言、参議

(ロ)左右大弁、左右中弁、右少弁、左少史、大外記、蔵人

(ハ)式部卿、式部大輔、式部丞

(ニ)左衛門督、左衛門権佐、左衛門尉、右兵衛佐、弾正大弼、近衛中将・少将、近衛将監・府生・番長、檢非違使

(ホ)大炊頭、春宮権亮、春宮大進、中宮権大夫

(ヘ)大宰大貳、近江守、修理大夫、治部録、内舍人、文章生、東宮祈禱僧

これらの中で、(イ)(ロ)(ハ)は政策決定、日常的な政務手続、公的行事の執行、官人組織における人事等にあたるものであり、職掌柄、天皇や摂政・関白、太政官の上卿との接触の多い官職であるといえよう。また(ニ)群は、宮中の守衛、非違の糺弾を役目としており、(ホ)群は天皇、皇太子、皇妃に仕えるものであるから、これらの人々も内裏への出入が日常化していたと思われる。

元々、「恐懼」・「勘事」による処罰は、奏上によるものや「公家勘事」とあるものは勿論、それ以外の場合も、天皇や摂政・関白の命によるのが普通なので、職務上、天皇の周辺に位置する官人が処罰の対象になることが多いのは自然の成行きであろう。

処罰を蒙った者の身分をみても、表Iの⑤が「殿上侍臣五位以上」を対象にしていることに象徴されるように、殿上人及びいわゆる貴族階級に属するものがほとんどである。表Iにとりあげた人物の全てについてその帯する位階を確かめるのは困難であるが、参考までに『官位令』の相当規定によって推定してみると、そのほとんどが四位、五位に集中しており、六位以下に下るものは、左右馬助、右兵衛佐、左衛門尉、大外記、左少史、東宮大進、式部丞、治部録等十指に満たない。これらは節会や仗議の場で違失を咎められ、処罰を蒙ったもので、その場面では、職務上天

皇の周辺にある高官と同様の位置にあったとみることができる。官職の分類における(ハ)群の者達についても同じ考え方が可能である。

従って、表Ⅰから得られる知見を総合してみると、「恐懼」・「勘事」は官人の職務上の違失や公的行事の欠怠に対して科せられるもので、その対象者は多く五位以上の貴族階級に属し、官職の上でも議政官組織や政務執行機関の構成員として、天皇の周辺に位置する人物が多いということになる。

ところで、先述の如く、摂関期における官人処罰の方法としては他に「怠状・過状」の徴収によるものが行なわれている。「怠状・過状」とは、要するに、摂関期以降、使庁において強・窃盗等の容疑者を逮捕・尋問して自供が得られた場合にはその内容を文書に作成し、裁判において証拠文書として使用したものである。また、これとは別に、奈良時代から、官人に職務上の違失があった場合、本人が自ら非を認めて始末書として作成する文書も「怠状・過状」と呼ばれていたが、この種の「怠状・過状」の徴収は摂関期に入ると次第に科刑化していった。即ち官人に違失があった場合には、本人の意志に関わりなく、「怠状・過状」の提出を命じ、一定期間後、これを返給することでその罪を免ずるが、その期間中、参内等の停止という効果を付与したのである。

参内停止等の効果の点において、「怠状・過状」の科徴は「恐懼・勘事」と類似性をもつのであるが、両者を比較してみると、処罰の適用範囲に差異のあることが知られる。表Ⅱは摂関期の官人処罰における「怠状・過状」の史料を一括して掲げたものであるが、これをもとに「恐懼」・「勘事」と同様の検討を行なってみると、まず、処罰の原因となった行為としては公事欠怠や職務上の違失等がほとんどであり、この点では「恐懼」・「勘事」との間に差異は認められない。次に、被処罰者の官職を分類してみると次の様になる。

(イ) 右少弁、左大史、右少史、大外記、外記、官掌

(ロ) 神祇祐、神祇史、式部大輔、式部少輔、式部録、兵部大輔、兵部少輔、中務録、

雅楽頭、右馬頭・助、内蔵権頭、内膳奉膳、正親正、采女正、太皇太后大進

紀伝道博士（文章博士）、明法博士、曆博士

(イ) 左右衛門佐・尉・志、佐兵衛尉、近衛將監・將曹・府生、番長、案主

(ニ) 大和国司、下野守、下総守、山城介、讃岐介、前出羽介、郡司

(ホ) 伊勢齋宮、僧綱

(イ)は太政官関係、(ロ)は神祇官及び八省関係、(ハ)は衛府関係、(ニ)は地方官、(ホ)はその他であり、これによれば、国司、郡司も含めた広範囲に亘る官人層を対象にしていることが知られる。しかし、太政官では参議以上のいわゆる議政官組織の構成員に対する例はみられず、また殿上において政務に携わる藏人も含まれていない。それ以外の八省や衛府についても同様であって、それぞれの長官が「怠状・過状」を徴収された例はみあたらない。

一方、処罰対象者の位階を「恐懼」・「勘事」の場合と同様、『官位令』の相当規定によって推定してみると、大半が六位以下に集中しており、五位以上の相当官は右少弁、式部大輔、左右衛門佐、兵部輔、式部輔、雅楽頭、右馬頭、内蔵権頭がそれぞれ五位に相当するのみである。

従って、表Ⅰ・Ⅱをもとに「怠状・過状」による処罰と「恐懼」・「勘事」を比較してみると、「恐懼」・「勘事」による処罰の対象者は、「怠状・過状」によるそれよりも、官位においてより高い階層に傾いているとみなして差支えあるまい。しかも、その傾向が位階よりも官職について明確に表われていることは注目に値する。例えば、藏人の場合、その位階は五位以上、六位以下の双方にまたがるわけであるが、表Ⅰ・Ⅱを見る限りでは、「怠状・過状」を徴収された例はなく、複数の例は全て「恐懼」・「勘事」によるものである。藏人の職務の内容は殿上にあつて天皇に近侍し、政務に携わることであるから、職務上の違失による処罰に際しても、その位階よりは官職の性格の方により注目すべきであろう。

十日を越えないのが通例である」としている。表Ⅰによれば実資の言とは異なり、「恐懼」・「勘事」にして十日を越える例も存在するから、必ずしも「勘事十日」が原則とはいえないが、平均八日という数字は考慮に値すると思われる。また、『小右記』寛弘二年正月十六日条によれば、踏歌における濫行によって、藏人少将藤原経通が勘事に処せられているが、同二十四日条には

先日経通被処勘責云々、経通云、未有^(勘カ)勤免者

とあり、この日に至っても優免されざる旨を述べ立てているから、ここにも「恐懼」・「勘事」は比較的短期に解除されるはずであるとの期待が窺われよう。

さらに、「怠状・過状」の性質を論ずる上で見逃しえないのは表Ⅱの備考欄に散見する如く、官人の職務上の違失に対する処罰であっても、「怠状・過状」をもとに法家に勘罪名を命じている例が存在することである(⑮、⑰、⑱、㉔)。官人の場合、謀反、殺人、闘乱等の重度の刑法犯については「怠状・過状」をもとに断罪科刑を行なうが、職務上の違失に関しては「怠状・過状」の徴収とその効果としての謹慎処分で済ませるのが普通であるから、表Ⅱにみられる罪名勘申は例外的なものといえよう。しかしながら、律令法による断罪科刑の可能性が存在するということは例えそれが潜在的なものであるにせよ、官人にとって畏怖すべきことであって、この点でも「怠状・過状」の徴収は「恐懼」・「勘事」に比してより嚴重な処分であったと思われる。

ちなみに、律令法は犯罪の処罰に際しても官人と一般公民を嚴格に区別しており、官人については各種の閏刑・換刑が設けられているが、特に五位以上の貴族は刑の減免等の大幅な寛典に浴している。⁽³⁾「怠状・過状」と「恐懼」・「勘事」の関係もこれに類似するものであって、双方共、律令法による断罪科刑手続を簡略化した処罰態様でありながら、「恐懼」・「勘事」の方が手続上、より簡便であり、天皇の周辺に在る一群の官人に対する処罰法として日常的に用いられていたものと考えられよう。

尚、ここまで殊更に「恐懼」・「勘事」と「怠状・過状」の差異を数えあげてきたが、根本において両者は同一の性質をもつものであることを改めて指摘しておかなければならない。即ち、「恐懼」・「勘事」と「怠状・過状」による処罰は官人が自ら罪過を承認し、服罪の意志を表明することから発展したものであって、その本質は官人の「自律性」に求められる。その背景には「刑へ大夫ニ上ラス」という法思想上の原則が存在しており、特権階級は刑吏の手にかかるときではなく、必要があれば自ら律するとの自負が込められているのである。従って、官人が自ら「怠過を認め恐懼」という意識の有無が処罰法として成立する場合の重要な要素となるのであって、右の様な觀念に支えられているのでなければその法的効力を維持することは困難であろう。現に、「恐懼」の処分を受けてもこれを意に介しない不心得な人間も存在した様で、『小右記』万寿二年九月五日条には、

先年闕陪膳番範圍奉御召問、無所避、即仰可恐由之処、陳云、是朝恩也、六月暑熱間可休息者、希有者也者、

とあり、陪膳の当番を欠怠し、「恐懼」に処せられた平範圍が、(謹慎について)六月暑熱の間に休息を賜わるは朝恩なりと放言している。同人について『小右記』は「希有の者なり」と評しているから、このような例は稀であろうが、いずれにしても本人の服罪の意志の有無が重要な要素であることは否めまい。

再言すれば、「恐懼」・「勘事」及び「怠状・過状」による処罰は、罪過の承認・服罪の意志の表明という自律的行為から出発して、次第に上から科せられる他律的な処罰に変化し、攝関期の官人社会における法慣習として一般的に行なわれていたと考えられるのである。

四、「恐懼」と律令法に基づく処罰

前章では「恐懼」・「勘事」及び「怠状・過状」が一定の区分をもちながらも、官人の違失に対する処罰として慣習

的に行なわれていたことを明らかにした。本章では法慣習としての「恐懼」等と律令成文法との関係について、その法的効果の面から論じてみたい。

「恐懼」・「勘事」や「怠状・過状」による処罰の効果としては参内・公事参列・公務の停止が挙げられるが、官人に対する処罰として最も象徴的な意味をもつのは、やはり参内の停止である。特に、天皇に近侍する地位にある者にとってその影響はより重大であるが、このような高級官人に対する処罰を問題にするならば、今一つ考察の対象にすべきものが残されている。それは殿上人の籍簡を削り、昇殿の資格を剝奪する「除籍（削簡）」であって、この処罰法は天皇の周辺から斥けるという効果の点で「恐懼」・「勘事」に近似している。また処罰の対象をみても、藏人は勿論、昇殿を許された貴族層は「恐懼」・「勘事」及び「除籍」の双方の対象になりうるわけで、この点にも両者の類似性が窺われる。

そこで、「恐懼」・「勘事」と「除籍」がいかなる関係にあるかが問題となるが、この点については、第二章に掲げた『左経記』治安元年六月二十四日条が答えを示している。即ち、同条に

殿上有起請、当番人不参、一度恐、二度除籍（後略）。

とあり、殿上起請によって当番の官人が欠怠した場合、初度は「恐懼」、二度に及べば「除籍」に処すべきことが定められている。第三章に掲げた『小右記』万寿二年九月五日条の記事で、陪膳当番を欠怠した平範国が「恐懼」に処せられているのもこの起請によったものであろう。

類似の史料としては、『小右記』長徳二年四月二十四日条に藤原伊周、同隆家の左遷事件に縁坐・連坐した人々への処分の一覧が載せられているが、ここでは、左遷・除籍・勘事の順で人名が並べられている。同史料については次章に再び触れるが「除籍」と「恐懼」・「勘事」では「除籍」の方がより重い処分として意識されていたと思われる。

尤も、処罰の対象となる行為の内容についていえば、「恐懼」・「勘事」と「除籍」の間に際立った差異は認められ

ない。

「除籍」については、既に渡辺直彦氏が、摂関期の史料にみえる除籍について検討を加え、対象となる罪過を抽出しておられるが、それによれば、

①闘乱および傷害を加えた場合は無論のこと、②公事不恪勤、③縁坐、④上日・上夜の不足、⑤当番闕怠、⑥喚問拒否、⑦漏重、⑧誹謗

等に対して、「除籍」処分がとられていたとされており、表Ⅰにみえる「恐懼」・「勘事」の原因行為とほぼ共通していることが知られる。故に、いずれの処罰によるべきかは、多くの場合、個々の事件の状況と懲戒権を有する者（基本的には天皇及び摂政・関白の判断にかかっていたと思われる、この点で、律令法の規定に基づく断罪科刑手続とは大きく異なっている。

ところで、「除籍」、「恐懼」・「勘事」及び「怠状・過状」による処罰は結果として官人の本来の職務をも停止する効果を有しているわけであるが、実は、官職の停止・剝奪ということであれば、これらの慣習的処罰法の出現を待つまでもなく、律令法の中にも「解官」に関する規定が設けられている。また平安時代においても律令法とは異なるがやはり「解官」がみられ、さらに「停任」と称する処分も行なわれている。従って、「除籍」及び「恐懼」・「勘事」の性格を明らかにするためにはこれらの官職の停止を内容とする処罰法と比較検討してみる必要があると思われる。

そこで、まず律令法にみえる官職の停止をとりあげると、(イ)『名例律』による除免官当、(ロ)『考課令』による考解(ハ)『獄令』による別勅解任、の三種のものがあげられる。

(イ)の除免官当は官人が罪を犯した場合、一定の基準によって、その位階・勲等を奪うものであるが、官位相当の原則があるために、結果として官職も停止されることになるわけである。

さらに細分すれば、除名・免官・免所居官は官人が八虐・故殺人、監臨主守盜、受財枉法等の特に定められた罪を

犯した場合に、律による本来の正刑に加えて付加刑として科せられるものに対して、官当は犯罪の種類に關わりなく、官人が流・徒の量刑に相当する罪を犯した場合に実刑に代えて位階勲等を奪う換刑である。⁽⁵⁾

尚、除免官当は再叙に關する明文規定を有しており、それぞれ、除名は六載、免官は三載、免所居官及び官当は葦年二年を経過した時迄の後に先位より降して叙すべきことが定められている。⁽⁶⁾

次に(四)は官人が犯罪によって考を降とされ、一定基準以下に至った場合に現任の官職を解くものである。『考課令』犯罪附殿条に、

凡官人。犯罪附殿者。皆抛案成乃附。私罪。計贖銅一斤。為二負。公罪。二斤為二負。各十負為二殿。(中略)自_二上中_一以下。率_二殿_一降_二等_一。

とあり、官人が罪を犯すとその軽重によって考を降とすことが定められているが、さらに次条の犯私罪条に

凡官人。有犯私罪下中。公罪下々。並解見任。即依法合除免官当者。不在考校之限。並奪当年祿。(本注略)其考解者。葦年聽叙。

とあって、犯罪附殿条によって考を降した結果、その犯罪の性格が私罪ならば下中、犯罪が公罪であれば下々の考に至った場合はそれぞれ現任の官職を解くことになる。文中に、除免官当は考校の限りにあらず、とあるから『名例律』によって直ちに断罪科刑する除免官当と勤務評定(考)を経た上での考解は区別されていたことが知られる。従って、考解は除免官当に至らざる犯罪を対象にしたものと考えられよう。

但し、考解は葦年の後再叙を聴すとあるから、除免官当と同様、位階を奪うことが基本であり、この点では両者の間に差異はない。⁽⁷⁾

(六)については、『獄令』囚犯移配条に、

凡官人、囚犯移配、及別勅解見任、若本罪不合除免及官当者、位記各不在追例。

と規定されているから、別勅によって現任官を解く場合には、除免官当とは異なつて位記は破毀せず、単に官職のみを停止したことが知られる。

以上が律令法に基づく官職停止処分の概要であるが、撰関期に入ると律令法による手続をできるだけ簡略化する一般的な傾向が生まれ、官人の違失に対して処罰を下す場合にも除免官当や考解などの律令に規定された手続を経ることなく、簡便な形で処分を行なう例が数を増してくる。

撰関期の史料にみえる「解官」、「解任」、「停任」、「停董務」等は概ねこの種の処分であつて、その手続については、例えば『新儀式』⁽⁸⁾第五に

朝士若有罪者。随其輕重或追位。或解官。大臣奉勅。宣下所司。令追位記毀之。其儀見儀式。(中略) 又追位。解官。左遷等者。懲肅之後。經二三年。有復本位本官者。

と記されている。これによれば、律令法による除免官当や考解が処分後の再叙に至る期間を六載から暮年まで詳細に規定していたのに対して、ここではただ、二、三年後の復帰の可能性を示すに留まるなど、律令法の原則とは異なる形で「追位」、「解官」を行なつていたことが知られよう。

次に、撰関期における官人処罰としての官職停止の例をいくつか引き出してみると、まず『小右記』永祚元年六月十二日条に、

今日衛府官人直闕者九人解却見任、左近將監原為規・右近將監原能信・藤原昌時・將曹多好茂・右兵衛尉高志季齊・源為貞・府生山村実光者とあり、陣直を欠怠した衛府官人を解任しているが、同六月二十四日条に

詔。大赦天下。(中略) 又去十日解官諸衛官人被恩免。

とあり、処分から十二日後にこれらの官人を復職させたことが知られる。ここでは「解官」としているが、この処分が官当や考解によるものであったとは考えにくい。抑も衛府官人が陣直を欠怠した場合の罰則は『衛禁律』に規定が

あり、同律宿衛人上番条は

凡宿衛人応下番不到、及因仮而違者、一日笞二十、三日加一等、過杖一百、五日加一等、罪止徒二年。

とされている。これを官当に替える場合、仮に右兵衛尉を例にとると、相当位は正七位下であるから、『名例律』官当条によって私罪ならば徒一年、公罪であれば徒二年まで位階を以て実刑に代えることができる。陣直欠怠は性質上、公罪とみなされるから徒二年に当たりますが、これは偶然にも『衛禁律』宿衛人上番条に規定する最高刑と一致し、この限りでは官当の結果、現任を解却したとも考えられよう。しかし、律令の規定に沿って断罪手続を進めたのであれば、当該事件の場合、官当の適用を行なう必要はなかったと思われる。なぜならば、七位以上の官人が流以下に相当する罪を犯した場合、『名例律』減条の

凡七位勲六等以上。及官位。勲位得請者之祖父々母々。妻。子孫。（本注略）犯流罪以下。各從減二等之例。

という規定により、罪一等を減ずるから、実際の処断刑は徒一年半であり、官当の許容刑よりも低くなるので、『名例律』以官当徒条の

凡以官当徒者。罪輕不_レ_レ_レ_レ_レ其官。留_レ官收贖。（後略）

という規定によって官はそのままに留め、代わりに贖銅を徴収する筈だからである。

この結論は考解の可能性についても同様である。徒一年半は『名例律』徒罪条によれば贖銅三十斤に相当する。そこで前掲の『考課令』犯罪負殿条に照らして公罪は二斤をもつて一負と数えらると、十負一殿となり、考一等を降すに留まるから、当該官人の「考」が官職を解かれる下々にまで至ることはまず考えられない。

しかも、徒二年というのは『衛禁律』に規定する最高刑であって、これに達するために単純に計算しても四十日近くの欠直が必要になるが、この時期の史料を通覧すると、陣直欠怠による処分とは大抵の場合、特定の一夜のそれを問題にしているのである。当該事件の場合にはその点が明示されていないが、それにしても長期に亘る欠勤を対象

にしたものとは思われない。

従って、『小右記』当該条にいう「解官」とは律令法に規定する除免官当・考解とは異なり、『新儀式』にみられる類の別種の科刑であり、強いて律令法との関連を探すならば、『獄令』の別勅解任の変形ともいべきものであるということになるろう。

『本朝世紀』正暦四年七月二十一日条に、

被_レ下_レ昨日直闕諸衛官人停任宣旨。(人名省略) 件等人依_レ不_レ参。勅計所_レ解任_二也。

とあって、ここでは一夜の陣直の欠怠について天皇の意を受ける形で宣旨が下され、諸衛府の官人を直ちに解任(停任)したことが明確に示されている。

またこのような停任処分が除免官当等とは異なり、位階には影響しなかったことは次の史料によって知られる。

『日本紀略』寛弘元年十二月二十八日条に、

大宰権帥惟仲卿停任。以_レ左兵衛督藤原高遠。任_二大宰大貳。依_二宇佐宮司_一也。法家所_レ勅_二申罪名。殊有_二其罪。只停_二其職_一也。

とあり、宇佐宮司の訴えによって大宰権帥の平惟仲を停任に処したことがみえる。惟仲は翌年に至って死亡するが、その寛弘二年三月十四日条では惟仲の官位を

前大宰権帥從二位中納言平朝臣惟仲薨_二大宰府。

としているから、これによれば前年の「停任」は從二位中納言には影響がなく、大宰権帥のみの停止であったと考えられよう。

この点は「解官」も同様であって、前掲の『新儀式』の記載に「追位」と「解官」を区別していることから知られるように、位階の剝奪を伴うものではないから、律令に規定する除免官当のように位階の剝奪を基本とし、結果

として官職を解く処罰とは明らかに異なっている。

また「停釐務」についても、撰関期には官職を停止する処罰として行なわれていたことが知られる。

釐務の停止は既に律令法に規定がみられ、『考課令』内外官人条に

凡内外官人。准考心解官者。即不合釐事。待符報即解。

とあり、考の評定によって解官と決まればその時点で執務を停止され、太政官による正式の手続を待つべきことが定められている。

さらに、『獄令』除名官当条に、

凡犯罪_レ不_レ得_レ釐事及朝会。

とあって、除免官当の者もその釐務を停止すべきものとされている。

しかしながら、律令法にいう釐務の停止は考解や除免官当の効果として行なわれるものであって、それ自体が独立に刑罰的機能を有するものではない。これに対して、撰関期の史料にみえる「停釐務」はそれ自体が独自の処罰として行なわれるものであって、律令法の釐務の停止とは性格を異にしている。一例を掲げるならば『左経記』長元元年六月二十四日条に、

傳聞四月廿五日藤原時遠王^(平カ)為行等於肥後守成章朝臣欲合戦之間、右衛門尉貞重向彼場、爰雖無合戦之實、各帶弓箭率隨兵之由普有其聞、貞重須擲其身言上事由、而不加糺斷無勅追捕、請取為行將去已了、因茲可召進件為行之由雖令仰下、已有容隱心、專無召進之勤、仍為勘問其由再三雖令召、稱有身病遂不參、宜令明法博士勘申罪名之由、右大弁有勅仰右府云々、

とあり、藤原時遠、平為行等の引き起こした合戦（實際は集合に留まったが）の場に赴いた右衛門尉平貞重が糺弾追捕を加えず、かえって為行を容隠して咎めを蒙り、再三の召喚にも応じないため、勅により明法博士をして罪名を勘申せしむべきことが命じられている。勘罪名に基づく処罰は同七月二十日条に載せられているが、そこには

仰云、右衛門尉平貞重可停釐務者、是前日時遠為行依合戰事被勘罪名所被行云々、
 とあり、「停釐務」に処せられたことが知られる。さらに同八月十三日条には

左衛門尉平貞重如元可從釐務之由有宣旨云々、是依改元詔所被免、

とみえ、改元の恩赦(同七月二十五日条)によって貞重はその罪を赦され、職務に復帰している。当該事件における「停釐務」は明法博士による勘罪名を経てることや恩赦の対象になっていることからみて、刑罰的性格をもつ処分として行なわれたと考えて差支えあるまい。⁽⁹⁾

ところで、撰関期において律令法の原則とは異なる形で「解官」「停任」等の処罰が行なわれていたとすると、その性格は、「除籍」や「恐懼」・「勘事」と類似しており、特に、「恐懼」・「勘事」は単に「解官」・「停任」等の結果を表わすものにすぎないのではないかとの疑問すら生じ得る。しかし、結論から述べるならば、「除籍」、「恐懼」・「勘事」は独立した科刑として行なわれていたのであって、「解官」・「停任」とは明確に区別されるべきものであったと考えられる。

『小右記』万寿四年四月八日条に

今日依打久頼事被除俊経籍、依関白召大進懐信参入、即還参啓事由於殿上、以藏人令削簡、
 とあり、藏人内匠助橋俊経に対して除籍の処分が行なわれている。原因は従者を指嗾して主殿允三島久頼へ刃傷に及ぼしたことであり、この後、別に勘罪名が予定されていたが、最終的には同四月二十八日条に⁽¹⁰⁾

頭中将頭基来伝勅語云、内匠助橋俊経可停任者、召大外記頼隆宣下畢、

とあって、天皇の判断で勘停任の処分を命じている。右の史料によれば、昇殿の資格を剝奪する「除籍」と律令官制に基づく官職を停止する「停任」とは別個の処分として区別されていることが知られる。俊経の場合、藏人内匠助を兼任しているわけで、藏人については「除籍」によって当然職務の遂行も不能になったと思われるが、内匠助の職務は「除籍」の影響を受けず、「停任」によって初めて停止されたものであろう。

また、『小右記』長元四年三月十四日条に

式部卿王氏爵事、已無所避、停釐務、處勘事、

とあり、式部卿敦平親王の釐務を停止し、さらに「勘事」に処したことがみえる。該事件は同年正月の叙位に源良國が王姓を偽称して四位に叙せられたことが発覚したために、責任者である式部卿を処分したものである。⁽¹⁾『左経記』にも同事件に触れた記事があつて、同長元四年三月十四日条に、

（天皇）仰云、式部卿親王、去正月七日叙位、以滿稱寛平御後良國王、拳王氏爵之由、被尋問之處、無所避申、須令勘其罪名、任法被行也、而然有所思食、唯停釐務可恐申之由可仰、（中略）（相府）仰式部卿親王依誤拳王氏爵位、釐務并可恐申之由、差外記輔親可遣仰者、暫被退出、

とみえ、式部卿が釐務を停止されたほかに、「恐懼」を命じられ、内より退出している。

さらに院政期に下る史料ではあるが、『本朝世紀』康治元年七月十二日条に

内大臣召_ニ外記_一仰曰。參議藤原公行卿。左馬頭隆季。右中将忠頼。右兵衛佐公重。左兵衛佐平家盛可_ニ恐懼。不_レ供_ニ奉去五日行幸_一故也。左兵衛佐藤原隆教可_ニ停任_一者。

とあり、行幸に供奉せざる官人に対して、「恐懼」と「停任」を区別して科している。同記事はこの後に「恐懼」、
「停任」を命じる宣言を載せており、いずれも貴重な史料であるので、次に全文を掲げる。

左兵衛佐藤原朝臣隆教

内大臣宣。奉_レ勅。件人不_レ參_ニ仕去五日_一行幸。宜_ニ停任_一者。

康治元年七月十二日 大炊頭兼大外記助教中原朝臣師安_奉

左馬頭藤原隆季朝臣

右近權中将藤原忠頼

右兵衛佐藤原公重

左兵衛権佐平家盛

内大臣宣。奉勅。件人等不參仕去五日。行幸。宜恐懼。

康治元年七月十二日

大炊頭兼大外記助教中原朝臣師安奉

以上の史料によって、同じく官職停止の効果をもちながらも、「除籍」及び「恐懼」・「勘事」が、「解官」、「停任」とは異なる別個の処罰として行なわれていたことが確かめ得たと思われる。

この場合、両者の処罰としての性格の差異が奈辺に存するかという疑問が生じるが、それについては一応次のような回答を示しておきたい。

即ち、「解官」、「停任」、「停釐務」が官職の停止によって対象者を律令制的官僚機構から除外することを内容としているのに対して、「除籍」及び「恐懼」・「勘事」は天皇に近侍する比較的高位の身分の者について、清涼殿やその外縁としての内裏など天皇を中心とする一定の空間から疎外するところに処罰の意義があり、潜在的に自律性を有することや特権的な身分の表象を奪うという点で、一種の名誉刑的な性格を帯びていると。

五、慣習的処罰法の出現と撰関期における政治機構の変化

前章まで、「除籍」、「恐懼」・「勘事」等が主として公卿層、殿上人を含む上層官人に対する処罰法として行なわれていたことを述べてきたが、このような官人処罰法が一種の法慣習として確立したことは平安中期における政治機構の変化と密接な関係をもっていると思われる。また、「除籍」、「恐懼」・「勘事」等は律令法による断罪手続を経ることなく、天皇及び摂政・関白が独自の意志で科しうる点に特色があり、新たに形成された官人群に対する統制強化の

手段として利用されたという側面も有している。本章ではこれらの点についてやや詳しく論じてみたい。

摂関期における政治形態については、摂関家の政所で国政がとり行なわれていたとするいわゆる政所政治論がほぼ否定され、この時代においても国政の中心は朝廷にあったとするのが近時の通説である。⁽¹²⁾

またこのような考え方の下で、朝廷における政治の「場」のあり方が関心の的となり、政務や儀式の行なわれる「場」の変化を迎えることによって、律令制から摂関制への移行過程における政治機構の変化を解明しようとする試みも行なわれている。⁽¹³⁾

近時の諸研究の成果を踏まえた上で極めて大雑把に言えば、藏人所の発展にみられるように、宮廷内の「所々」が整備拡充されて、本来天皇の家政機関にすぎなかったものが朝廷の機構として確立したこと、近衛陣における陣議の開催に代表されるように政治の「場」が天皇の居所である内裏へと移行し、公卿等の内裏への伺候が日常化したことなどが摂関期における特色としてあげられる。

また官職体系の内部にも変化が生じ、公卿層が参議以上の議政官や近衛府をはじめとする六衛府の長官、春宮・皇后宮の長官、檢非違使の別当、勘解由長官、左右大弁等の官職を兼帯するようになったことも重要である。これによって五位以上を貴族階級として重視する令制の位階原則は本来の意義を失い、三位以上の公卿を中心とする議政官、或いは議政官と天皇・摂関を結ぶものとしての藏人、さらには武力機構としての檢非違使等の特定の官職が官人の希求の的となっていくからである。

要するに、天皇を中心として内裏という一定の政治的空間が発生し、人的にも天皇の周辺に摂政・関白、公卿、殿上人等を中核とし、特定の官職を独占する新たな官人群の形成されていたことが摂関期の状況としてあげられよう。⁽¹⁴⁾

「除籍」、「恐懼」・「勘事」等による官人処罰はまさにこのような政治機構の変化に対応して生み出されたものであって、本来私的な制裁として広く行なわれていた勘当、勘事、謹慎（恐懼）等を公的制裁へと転化し、内裏という天皇

の周辺空間から放逐することによって同時に政治機構からの排除、身分的標識の剝奪という効果をあげて狙ったものと推測される。

「天皇家政機関の拡充及び「殿上の間」の公的「場」への転化がそこに伺候する殿上人の統制手段として「除籍」という新たな処罰法を創出したことは『侍中群要』第三「陪膳事に載せる次の史料に端的に示されている。

陪膳番 一番 子辰 実成朝臣 相尹朝臣 憲定朝臣 頼説朝臣 明順朝臣

二番 丑巳 説孝朝臣 生昌朝臣 近信朝臣 公信朝臣 高雅朝臣

三番 寅午 陳政朝臣 和章朝臣 朝経朝臣 頼通朝臣 明理朝臣

四番 卯未 則忠朝臣 道方朝臣 頼定朝臣 奉職朝臣 济政朝臣

右依仰所定如件、但先触女房、若有闕怠、守次勤仕、無故障三度闕、不可令昇殿者

寛弘二年六月廿三日

寛弘二年に藏人頭藤原実成をはじめとする四位の殿上人をもって陪膳の当番を定め、殿上に奉仕すべきことを定めたのであるが、そこでは故無く三度当番を欠怠した場合、「除籍」に処すべきものとしている。

官人の懈怠に対する罰則はすでに律令に規定があり、『職制律』官人無故不上条が凡官人無故不上。及当番不到。若因仮而違者。一日笞廿。三日加二等。過杖一百。十日加二等。罪止徒一年半（後略）。

と定めている。しかし、該史料では律令の規定には何ら触れるところがなく、むしろ令制にはない「殿上人」たる身分に着目して、「除籍」という新たな処罰法をもって臨んでいるのである。

陪膳当番の欠怠に関する罰則は、前掲の『左経記』治安元年六月二十四日条にみえる殿上起請によって、この後さらに改正され、

一度目は「恐懼」、二度目は「除籍」

と定められるが、いずれにしても摂関期においては新しく起こった官職体系・政治機構の変化に対応して、律令法に規定する原則とは異なる処罰法を創出し、官人統制の実をあげんとしていることが知られるのである。

また「除籍」、「恐懼」・「勘事」等は本来私的な制裁としての性格を有するが故に、個々の違失の態様に応じてその都度、擬律・科刑を行なうという律令法の手続に支配されず、そのために、事実上、天皇及びその大権を委任された摂政・関白がほぼ任意に上層官人を処罰することが可能になっている。

以上の様な「恐懼」・「勘事」等の特色を示す一例として、藤原道長の権力確立の因となった伊周配流事件の経過を眺めてみたい。

『小右記』によれば、長徳元年七月二十四日に時の右大臣藤原道長と内大臣藤原伊周が伏議において激論をたたかわせ、その三日後に道長の従者と伊周の従者が七条大路で鬪乱に及び、遂に八月二日に至って、道長の隨身が伊周の弟中納言隆家の従者に殺害されるという事件が起こっている。『小右記』長徳元年八月三日条に

右府談云、隆家卿若不奉下手人者、不可参内之由被給綸旨、

とあり、この時、道長は天皇を動かして、犯人を差し出すまで隆家の参内を停止すべく綸旨を引き出している。『小右記』にはこれに対する隆家の反応は記されていないが、参内を停止されれば、事件の処理にあたってその発言を封じられることは明白であり、この措置が隆家にとって不利に働いたことは想像に難くない。右の処分は天皇の命によって直接参内を停止したものであり、「恐懼」・「勘事」とはやや性質を異にするが、「恐懼」・「勘事」も参内停止という効果の点では同様であるから、対象者の朝廷における政治行動を封じるという意味で公的処罰としての性格を有し

ていたと考えられよう。しかも、その処分が司法機関による裁判手続を経ることなく迅速に行ないえたことは重要である。

ところで、事件はこれで収まらず、『小右記』によれば長徳二年正月十六日の夜、伊周・隆家兄弟の従者が花山法王に矢を射かけたことが発覚している。二月五日には伊周が秘かに多数の私兵を擁しているとの風聞により、伊周の家司菅原董宣や源致光等の宅を検非違使が搜索し、同十一日には近衛陣に参集した右大臣道長以下に対して、伊周・隆家の罪名を勘申すべしとの天皇の命が伝えられている。実際には罪名勘申は直ちには行なわれず、四月に至るのであるが、この間に道長の姉東三条院詮子が病に臥し、寝殿板敷の下から厭物が掘り出されて伊周の呪詛によるものとされるなど伊周をとりまく情勢はさらに悪化していく。

この時期に注目すべき一つのできごととは伊周の叔父が「勘事」の処分を受けていることである。『小右記』長徳二年四月一日条に、

(前略) 此間大外記致時朝臣伝右大臣消息云、縁院御惱参入之間不能定申御禊前駈、可定奏者、(中略) 右兵衛佐道順有公家之勘事、時方任國与未成、此間可随勅定由、以行成令奏、仰云、奉道順不可差、(後略)

とあり、賀茂齋院の御禊の前駈を定めるにあたって、右大臣道長が病の女院(詮子)のもとへ詰めていて参内できないので、定め奏上すべき旨を申し送ってきており、これを承けて検討を加え奏上したところ、前駈予定者のうち、高階道順は「公家勘事」の身であるから差遣すべからざる旨の勅定が下ったことが知られる。高階道順は伊周の母貴子の兄で、伊周にとっては母方の叔父にあたる人物であり、後日、伊周の配流に縁坐して自らも淡路権守に遷されているから、この時期すでに伊周・隆家の引き起こした事件の影響を蒙って「勘事」に処せられ謹慎していたものと思われる。

結局、四月二十四日に至って、一、花山法王を射たこと、二、女院を呪詛せしこと、三、私に大元帥法を行なった

ことの三点を理由として、伊周・隆家等を配流すべく宣命が下され、あわせて関係者に対する処分も行なわれたのであるが、その内容は『小右記』によれば次の如くである。

配流

大宰権帥正三位藤原伊周元内大臣、

出雲権守従三位藤原隆家元中納言、

伊豆権守高階信順元右中弁、

淡路権守高階道順元右兵衛佐、木工才頭、

除籍

左近少将源明理四位、左近中将藤原頼親、右近少将藤原周頼、同少将源方理、

勘事

左馬頭藤原相尹、彈正大弼源頼定、

右の人々の中で、高階信順・道順は伊周・隆家兄弟の叔父であり、「除籍」の処分を蒙った藤原周頼・頼親は伊周・隆家の弟、「勘事」に処せられた藤原相尹は伊周等の祖父兼家の弟遠量の子である。従って、該事件では親類たるに よって縁坐すべき人物に、「除籍」や「勘事」の処分をもって臨んだことが知られる。

抑も、法王への傷害未遂や女院への呪詛は「名例律」八虐の謀反に准ずる大罪であり、八虐の縁坐は賊盜律謀反条に、

凡謀反及大逆者。皆斬。父子。若家人資財田宅。並没官。年八十。及篤疾者。並免。祖孫兄弟。皆配遠流。不限籍之同異。
(後略)

とあり、犯人の兄弟は遠流に処するのが律令の原則である。伊周等の処断理由は謀反そのものではないから、この場

合、必ずしも律令の原則を破る形で処罰が行なわれたとはいえないが、ともかくも公卿会議での罪名勘申を経た公的な処罰において「除籍」・「勘事」が縁坐処罰の一態様として採用されていることは注目に値する。

特に「除籍」は殿上人の存在を前提にして初めて成立しうる処罰法であるから、「除籍」が公的処罰として採用されているということはとりもなおさず、この頃既に昇殿制が確固としたものになっていたことを示している。

昇殿制の成立については、弘仁年間に成立の端緒をみる渡辺直彦氏の説や平安中期頃とする橋本義彦氏の説があるが、宇多朝に清涼殿に「殿上の間」が設けられ、さらに日給簡による上日の記録が開始されたことによって、清涼殿が天皇の日常政務の場を兼ねるようになり、そこに伺候する殿上人達も天皇の私的側近から公的な存在へと転化していくとする古瀬奈津子氏の指摘は重要である。同氏によればその背景には、律令制の官僚機構が次第に衰微し、摂関・藏人所・檢非違使といった天皇と私的な関係にある政治機構が発展していくという時代変化があったとされる。

このような摂関期における政治体制の変化が新たな官人統制法を必要とし、本来私的な処罰である「恐懼」・「勘事」等を公的な処罰法へと転化させたということができよう。

ここで官人処罰法における変化を辿るために、延喜元年に起こった菅原道真左遷事件における関係者の処分と前掲の伊周配流事件におけるそれとを比較してみたい。

『日本紀略』延喜元年正月二十五日条に、

諸障警固。帝御_三南殿。以_三右大臣從二位菅原朝臣_二任_三大宰權帥。以_三大納言源朝臣_二任_三右大臣。又權帥子息等各以左降。

とあり、道真等に対する処分が示されているが、ここでは左遷・左降のみがあげられている。子息らに対する処分の内訳は『政事要略』卷廿二、年中行事八月上（北野天神会）に載せる昌泰四年（延喜元年）正月廿七日左降除目の文に詳しいが、ここでも道長の長男大学頭菅原高視を土佐介に降とすなど関係者への処分は左降に限られている。また同じく『政事要略』に載せる三善清行の意見書には

近日京中大小皆云。外帥門弟子在諸司_二者。皆可_レ被_レ左_三貶。其文章生学生。皆被_レ放逐_二云々。

とあって、道真の門下の官人が左降されるとの噂が流れていたことを披歴しているから、結局、該事件では関係者に對して一律に左遷・左降の処分が行なわれるに止まり、伊周事件の際の如く、「除籍」・「勘事」の処分が下されることはなかったと思われる。

道真に対する容疑は宇多前上皇を惑わし、天皇の廢立を企てたというものであるから、やはり八虐に准じる罪であり、その点では伊周事件と類似しているが、右の様に、その処分態様には差異がある。

要するに、昇殿制の確立に象徴される政治機構の変化が宇多朝あたりに起こったとすると、道真左遷事件の時期には、未だ「除籍」及び「勘事」が公的な官人統制法として確立しておらず、一方、一世紀近くを経た伊周配流事件の際には既に、「除籍」及び「勘事」が公的な官人処罰法として一般化していることが知られるのである。

該事件が摂関政治の盛期を現出したといわれる道長の権力掌握の契機となったことは極めて象徴的であり、特に事件の当初に道長が天皇を動かして隆家の参内停止の綸旨を給わったことなどは「除籍」、「恐懼」・「勘事」が摂関期において新たな官人統制法として確立し、一面では天皇及び摂政・関白の権力を強化する役割を果たしたことを端的に示すものであるといえよう。

六、おわりに

以上、本稿では「恐懼」を中心に摂関期における慣習的官人処罰法について検討を加えてきた。その結論を要約すると以下の如くなる。

①奈良時代以来、神に対して恐れ畏る意を表わす語として恐懼が用いられてきたが、平安時代には謹慎を内容とす

る処罰法として「恐懼」が日常的に使用されるようになった。

②即ち、摂関期において、官人に職務上の懈怠、違失があった場合に、「恐懼」を命じ、原免までの期間、参内を停止し、謹慎を強制するものである。

③「恐懼」の対象となった官人をみると、参議以上の官職を占める公卿や殿上人、或いは弁官、衛府、春宮の上級官人ないし藏人など特定の官人群に集中する傾向がみられる。

④「恐懼」、「勸事」、「勸当」等、本来私的な性格をもつ制裁として行なわれていたものが、公的処罰法として利用されるようになった背景には次のような事情が存在している。

平安中期に至ると、天皇の居所であり、私的空間であった内裏が陣議などのために公卿が日常的に伺候することによって公的政治空間に転化し、同時に、公卿による議政官、弁官、衛府等の官職の兼帯が進み、藏人や近衛など一定の官職が重要な機能をもつようになった。そのため、これらの上層官人を統制する新たな手段が必要となり、律令法の原則とは異なる簡便な処罰法として「除籍」、「恐懼」、「勸事」等が創出されたのである。

昇殿制の成立に伴って「除籍」が殿上人に対する処罰法として設けられたのはその端的な表われである。

⑤特に殿上人に対する処罰法として「恐懼」は「除籍」と並ぶ重要なものであるが、両者は参内の停止、即ち天皇の居所たる内裏から放逐することによって、同時に公的な政治活動を停止し、特権的身分の標章を奪うところに処罰としての意義がある。

以上の点に加えて、「恐懼」等の処罰と律令法の関係について少し補足しておきたい。

繰り返し述べている如く、「恐懼」・「勸事」・「勸当」といった処罰は本来私的な性格をもつものであって、自発的な謹慎や日常的な叱責、懲戒として行なわれていたものが、次第に公的な処罰法としても用いられるようになっていったと考えられる。「除籍」も同様であって、天皇の居処たる清凉殿から放逐するという点で私的制裁たる性質を備

えており、内裏が政治の「場」となるに及んで、公的処罰へと転化したものといえよう。

その意味では、「恐懼」等は律令法とは異なる新たな法慣習であるといつて差支えあるまい。しかしながら、「参内停止」という効果の点に着目するならば、これらの処罰法も律令法体系と全く無縁のものとして断定することは困難である。『獄令』除免官当条に

凡犯罪_レ除免官当_レ三者。不得_レ釐_レ事及朝会_一。其被_レ勅推_一。雖_レ非_レ官当_レ除免_一。徒以上不得_レ入_レ内。其三位以上。非_レ解官以上者。仍聽_レ釐_レ事朝会。及入_レ内供奉_一。

とあり、これによれば官人が勅意により徒以上の罪に推断せられた場合には除免官当に非ずとも参内を禁じられること、また三位以上の者であっても解官（考解）に至った場合には参内のかなわぬことが知られる。右の規定内容は律令官人が古代天皇制を支えるものとして存在しており、官吏任免権も最終的に天皇に帰属していることから、当然に導き出されるものであるが、そこにみえる、罪ある官人はその身を天皇の周辺に置くことが許されないという考え方は「恐懼」「除籍」等と共通する点を有している。しかも、最後の順からいならば、律令法原理を背景にしながら、より簡略化された処罰法として律令法を変改したものが「恐懼」「除籍」であるともみなすことも可能である。

要するに、本稿でとりあげた摂関期における慣例は前代の律令成文法体系と全く無関係に生み出されたものではなく、律令法をより現実適合する形で変容再生した法慣習であるということができよう。

(1) 長谷山彰「平安時代裁判手続の一側面——怠状・過状の文書機能を中心として——」（『古代文化』第三十八巻第十二号、昭和六十一年）。

(2) 『左経記』長元七年九月五日辛卯条に

右大史義成申當年不堪文、通_卅左大弁跪腋床子云、以目錄可横挿也、而不横挿、須恐申也、而戒向後事不可令恐之由有上卿宣之由、仰座頭史守輔、

とあり、結政において目錄上呈の礼式に過誤のあった左大弁藤原重尹に対して、恐懼を命ずべきところ、上卿宣によって特に

向後を戒しめるに留めたことが知られる。これによっても「恐懼」が単なる叱責とは異なり科刑的性格を有していたことが知られよう。

(3) 『名例律』官当条、除名条、免官条、免所居官条により、それぞれ、官吏が徒流の刑を犯した場合に、特定の標準にしたがって、官位を以て実刑に換え、或いは、官吏が八虐、故殺人、反逆縁坐等の重罪を犯した場合に官位勲位を全て除いて官人の身分を剝奪し、或いは特定の犯罪によって官位勲位を奪い、或いはまた現在居るところの一官を免ずるものである。また『名例律』議条、請条、減条等により七位・勲六等以上の者及びその親族は減刑の恩典に浴する可能性がある。

(4) 渡辺直彦『日本古代官位制度の基礎的研究』増訂版、第五編第四章除籍と蔵人所客座の喚問、昭和四十七年。

(5) 『名例律』官当条。同除名条。同免官条。同免所居官条。

(6) 『名例律』除法条。

(7) 尤も、『考課令』犯私罪条義解には「考解之人、不可追位、而言聽叙者、猶云聽仕」とあるから、現実には官職のみを停止していた可能性が高い。

(8) 『群書類從』公事部。

(9) 『小右記』治安三年六月二日甲午条に、

可停釐務宣旨召大外記頼隆問先例、申云、停任宣旨外記所承也、至停釐務宣旨弁官承之、

とあり、停任と停釐務では手統の管轄が区別されていたことが知られる。

(10) 『小右記』万寿四年四月四日甲戌条

去夕主殿允久頼為東宮蔵人内匠助俊経於土東門内被打調并刃傷、三箇所、頭背手、以從者令為言々、一日久頼罵辱俊経、云々者一品禎子内親王乳母子、久頼者同宮下家司也、入宮之比不静事也、

『小右記』万寿四年四月十七日丁亥条

今日可被下可勘内匠助俊経罪名宣旨者、余答云、今日重日、明日吉田祭、明後日御衰日、廿日許被宣下宜歟、件日記等遣別当許、以後可下給者、以下官所陳之旨有可申闕白之氣色、

(11) 『日本紀略』長元四年正月十七日条に

今日。以外記遣式部卿敦平親王家。去五日叙位。良國王叙四位。件人有殺害犯之上。已非王氏。令毀彼位記。

被問根元。

とある。また同三月十四日条に、

式部卿敦平親王停_二鷹務_一。源良國者。大宰大監大藏種材男也。先年。射_二殺大隅守菅野重忠_一犯人也。忽改_二姓名_一。謀計也。とみえ、良國は実は大宰大監大藏種材の息男であつて、大隅守菅野重忠殺害の犯跡を晦ますために源氏を詐称していたことが知られる。また、『小右記』長元四年三月一日戊申条に

伝閑白御消息云、式部卿親王依王氏爵事、前日有被問之事、^(若也)遂可被尋問口入之人歟、将可被留王氏爵之是定歟、今年可有朔旦叙位、以他親王可令是定歟、良國有前犯之上、亦有斯事、可令追捕歟、^(後略)

とあるから、今回の氏爵に際して、敦平親王が王氏爵の是定として事にあつたことが確かめられる。

尚、『日本紀略』長元四年九月五日庚戌条に

式部卿敦平親王。如_二元可_一從_二省務_一之由。被_下三_二官旨_一。

とあり、『小右記』左経記にも同様の記事がみえている。

(12) 土田直鎮「撰関政治に関する二、三の疑問」(『日本史の研究』三三、一九六一年。のち『論集日本歴史3平安王朝』一九七六年、に所収)。

(13) 藤木邦彦「陣定について」(東大教養学部人文科学科紀要『歴史と文化』V、一九六一年)、橋本義則「『外記政』の成立」(『史林』第六四卷第六号、一九八一年)、橋本義彦「貴族政権の政治構造」(『岩波講座日本歴史』古代4所収、一九七六年)、橋本義彦「平安貴族社会の研究」(吉川弘文館、一九七六年)、所収「官奏の成立と儀式文」(瀧川政次郎博士米寿記念『律令制の諸問題』所収、一九八四年)、曾我良成「王朝国家期における太政官政務処理手続について——庁申文・南所申文・陣申文——」(『王朝国家国政史の研究』所収、一九八七年)、菊池京子「所」の成立と展開」(『史窓』二六号、一九六八年。のち『論集日本歴史3平安王朝』所収、一九七六年)他。

(14) この点については黒板伸夫氏が、平安中期において、天皇の権威を中心とし、上皇や母后、外戚である撰関、及びこれらとミウチの関係にある親王、賜姓源氏、藤原氏等の貴族集団が、政治の実権者としての権力核を形成していたとの指摘をなされている。同氏「藤原忠平政権に対する一考察」(『延喜天曆時代の研究』一九六九年所収。のち同氏『撰関時代史論集』一九八〇年、所収)。

(15) 渡辺直彦「藏人所の研究」(『日本古代官位制度の基礎的研究』増訂版所収、一九七八年)。

(16) 橋本義彦「貴族政権の政治構造」(『岩波講座日本歴史』古代4所収、一九七六年)、同氏「昇殿と殿上人」(『歴史と地理』二四九号、一九七六年)。

(17) 古瀬奈津子「昇殿制の成立」(『日本古代の政治と文化』所収、一九八七年)。

表I 恐懼・勤事(20)~(39)

番号	出典	年月日	処罰	原因	被処罰者	備考
39	左	寛仁元・10・8	〃	香稚姫宮等の神宝奉獻を誤脱	藏人	
38	御	〃 〃 5・7・20	恐懼	不明な障を理由に使を忌避	(皇太后宮権亮・侍従・藏人)	23日原免
37	小	〃 〃 5・5・5	〃		摂政隨身番長	摂政勤事
36	御	〃 〃 4・閏6・27	勤事	穢を運び諸社使の延引を招く	参議修理大夫	原免記事
35	御	〃 〃 4・正・3	勘当		(内藏頭)	原免記事
34	小	〃 〃 3・12・3	〃	左大臣(内覧)に触れず宣旨を発給せんとす	藏人	
33	小	〃 〃 3・11・21	勤事	殿上で飲酒し宮達の供をせず	左右中将・左衛門権佐	
32	小	〃 〃 2・7・10	勘責	他人を誹謗	藏人	
31	御	〃 〃 2・7・1	〃	御卜の手統遺漏		
30	御	〃 〃 2・5・12	勤事	申文を奏せざる忌	藏人	
29	小・世	長和2・4・10	恐懼	親王の雑色長を凌礫	春宮権亮	
28	小	〃 〃 8・3・12	〃		藏人	原免記事
27	小	〃 〃 2・正・24	〃	踏歌における侍臣の濫行を咎めず	殿上侍臣	
26	小	寛弘2・正・16	〃	踏歌での濫行	藏人少将	24日に未だ不免の由を訴える
25	権	〃 〃 5・11・18	勤事	節会失態カ	藏人	
24	権	〃 〃 3・6・19	勘当	弟子の犯罪の責	東宮祈禱僧	原免記事
23	権	〃 〃 2・12・21	恐懼	臨時祭調楽役欠忌	内舍人・文章生	原免記事
22	権	長保元・11・12	〃		式部丞	原免記事
21	小	〃 〃 4・3・26	〃	臨時祭陪従忌避	右中弁	原免記事、21日処分か？
20	小	長徳2・12・14	〃		式部大輔	

摂関期官人統制における慣習的処罰法

表I 恐懼・勤事(40)~(59)

番号	出典	年月日	処罰	原因	被処罰者	備考
59	小	〃〃4・3・16	勸責	芳帳に不明部分あり	中務省官人	
58	小	〃〃4・正・8	〃〃	随身の濫行	内大臣	
57	左	〃〃3・9・19	恐懼	正月七日節会不参	右少弁・官史	原免記事
56	左	〃〃3・7・14	勤事	左馬寮馬部を殴打	式部丞	
55	左	〃〃3・3・28	勤当	仁王会堂の莊嚴に疎略あり	藏人	
54	左	〃〃3・3・23	恐懼	被物調達の遺失		
53	小	〃〃2・11・13	勤事	過差の制を犯し織物着用	藏人左少将	
52	小・左	〃〃2・10・19	〃〃	射馬始に遅参	右大弁	
51	小	〃〃2・9・5	〃〃	上達部を罵辱す	近江守	10月2日優免
50	小	〃〃2・9・5	〃〃	陪膳欠怠	(藏人)	処分は先年
49	小	〃〃元・11・14	恐懼	不堪佃田荒奏に過失あり	官史	11月16日原免
48	小	〃〃元・3・4	勸責	關乱の報告遅怠	藏人檢非違使・左衛門尉	
47	小	万寿元・3・4	〃〃	從者の關乱	右頭中将・藏人右兵衛佐	七日間の勤事
46	小	〃〃3・12・27	勤事		馬頭・助	勤事によって不可参入
45	小	〃〃3・5・10	〃〃	東宮への不恪勤	左中弁	これ以前にすでに勸責を蒙る
44	小	〃〃3・正・7	勸責	白馬節会の運営に過失あり	大外記	正月11日免勤事
43	小	治安元・11・29	恐懼	奏報作成に誤脱あり	左少史	12月3日原免
42	御	〃〃2・8・27	勤事		東宮大進	原免記事
41	小	〃〃2・閏4・11	勤当	行幸の日に違失カ	左大弁	撰政勤当不従事
40	御	寛仁2・3・26	勤事	上長に無礼を働く	近衛府生番長	4月21日原免(小右記)

表I 恐懼・勅事(60)~(72)

番号	出典	年月日	処罰	原 因	被 処 罰 者	備 考
⑦2	左	〃〃7・12・9	勅事	明経得業生試の不正		
⑦1	小	〃〃5・11・27	〃〃	豊明節会遅参	参議中将	12月10日免勅事
⑦0	小	〃〃5・11・23	〃〃	五節所に不参	藏人	
⑥9	小	〃〃5・11・14	〃〃	官奏の儀に違礼あり	左少史	11月17日優免
⑥8	左	〃〃5・6・15	恐懼	家人の濫行	中宮権大夫	退出
⑥7	小	〃〃4・7・15	〃〃		治部録	原免記事
⑥6	小左紀	〃〃4・正・17	〃〃	王氏爵誤奉	式部卿親主・大宰大貳	
⑥5	小	〃〃4・正・16	〃〃	踏歌節会に遅参	左近少将	正月19日優免
⑥4	小	〃〃2・正・2	〃〃	元日節会の開門等に過誤あり	右近中・少将	正月5日優免
⑥3	小	長元元・11・17	〃〃	飲酒の上脱衣纏頭	頭中将	
⑥2	小	〃〃4・12・7	〃〃	道長の薨奏に行成の薨を加奏せんとす	大外記	閑白勅当、12月14日優免
⑥1	小	〃〃4・7・8	勅事		参議中将	先日処分、7月19日優免
⑥0	小	万寿4・5・3	勅当	殺害の事に関係	左近将監	優免記事、月来勅当

表II 怠状・過状(1)~(4)

番号	出典	年月日	処罰	原 因	被 処 罰 者	備 考
④	〃	〃〃12・8・28	〃〃	出奉収納の日犯過あり	収納吏	停釐務
③	三	〃〃10・6・28	〃〃	濫りに入京	国守	追却
②	政	貞観4・4・10	〃〃	訴状に偽りあり	郡司	贖銅
①	三	天長9・11・28	過状	道路・溝の清掃を怠る	諸司諸家及内外主典以上	式・兵部省に送り貶奪

摂関期官人統制における慣習的処罰法

表II 怠状・過状(⑤)~(24)

②4	②3	②2	②1	②0	①9	①8	①7	①6	①5	①4	①3	①2	①1	①0	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	番号
貞	〃	〃	世	貞	紀	西	貞	紀	〃	〃	〃	貞	西	貞	扶	紀	西	〃	実	出典
〃〃元・11・11	〃〃元・11・11	〃〃元・11・7	〃〃元・11・7	天慶元・4・25	〃〃6・2・18	〃〃5・4・1	承平2・6・8	〃〃8・3・2	〃〃5・12・10	〃〃4・2・7	延長2・5・24	〃〃19・正・23	〃〃17・正・22	〃〃14・5・21	〃〃11・5・27	〃〃9・7	延喜6・10	仁和2・9・5	貞観18・2・7	年月日
〃〃	〃〃	〃〃	〃〃	過状	過 ^(疾) 意	〃〃	過状	怠状	〃〃	〃〃	〃〃	〃〃	〃〃	〃〃	過状	過書	〃〃	〃〃	過状	処罰
	新嘗祭中院御湯供御遅滞	御曆奏欠怠	平野祭供奉欠怠	擬階奏不参	園韓神祭の日取り過誤	穢勤文失錯	臨時交易絹・春米違期進納		触穢参入	豊受宮勤文失錯カ	大神使に供給せず	位記の儀に不参	服日勤文失錯	罪名勤申遅延	日食の曆算誤る	国内騒乱	藏人所への使忌避	伊勢神宝使発遣の日廢務の解文を忘る	大原野祭停止にあたって誤りて大祓の有無を違言	原因
	主殿寮	陰陽寮	大膳職・大炊寮・左馬寮	式部省	神祇官人	神祇祐・史	讚岐介	渤海入朝使		神祇官	大和國司	外記	右少史	檢非違使	曆博士	下總守	左大史	〃〃	神祇官	被処罰者
	12月7日免		12月7日左馬寮を除き免					法家勸罪名	明法博士罪名勤申			返給記事								備考

表II 怠状・過状(25)~(44)

番号	出典	年月日	処罰	原因	被処罰者	備考
④④	〃	〃	怠状	擬文章生試において病者を及題とす	式部大輔・少輔	原免記事
④③	符	〃	〃	去年十二月荷前使欠怠	散位	
④②	紀	〃	〃	伊勢新宮心柱を誤りて立てる	祢宜内人	
④①	符	〃	〃	去年十二月荷前使欠怠	散位・下野守	原免記事
④①	西	天和4・正・18	〃	〃	位禄目錄を進上せず	中務録
③⑨	符	〃	〃	去年荷前使欠怠	山城介	返給記事
③⑧	〃	〃	〃	新嘗祭職務欠怠	掃部寮・大膳式	
③⑦	紀	〃	〃	〃	左衛門尉・右衛門大志等	
③⑥	〃	〃	〃	奉勅宣旨を奉行せず	右衛門権佐	
③⑤	〃	〃	〃	即位の日擬待従欠怠		法家勸罪名
③④	〃	〃	〃	及落題の判失錯	文章博士	
③③	貞	〃	〃	勘文失錯		
③②	西	〃	〃	宣旨紛失		
③①	符	〃	〃	季禄目錄進上せず	中務・式部官人	9月2日免
③①	西	〃	〃	諸卿の召しに応せず	官掌	
②⑨	〃	〃	〃	〃	前出羽介	
②⑧	〃	〃	〃	穢れを禁中に引來る	宮内省官人	
②⑦	〃	〃	〃	節会での違失カ	兵部・兵庫等省寮	2月某日寛免、但し過状留置
②⑥	〃	〃	〃	夜間陣直欠怠	六衛府官人	
②⑤	世	〃	過状	伊勢使欠怠	正親正	

撰関期官人統制における慣習の処罰法

⑥4	⑥3	⑥2	⑥1	⑥0	⑤9	⑤8	⑤7	⑤6	⑤5	⑤4	⑤3	⑤2	⑤1	⑤0	④9	④8	④7	④6	④5	番号
権	紀	〃	〃	〃	〃	権	紀	〃	〃	〃	小	〃	〃	〃	〃	紀	符	西	符	番号
〃	〃	〃	〃	長保2・正・7	〃	〃	〃	長徳2・3・4	〃	永延元・4・17	永観2・11・17	〃	天元5・5・1	〃	〃	安和元・8・18	〃	康保元・8・25	〃	出典
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	年月日
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
過状	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	詔書作成に誤記あり	国忌不参		白馬御覽に遅参	藤氏爵詐偽の者を推挙	上卿の参不を誤伝	文章生試過誤		螢惑星祭に奉仕せず	右大臣家雑色人右近中将等の車に投石す	無資格に勅語伝宣	文章得業生策文評定の過誤	正月七日節会遅参	一分召に過誤あり	去年十二月廿九日郡司召不参	〃	文章生試題失錯	六月御卜に違失	御読経不参	原 因
右馬寮	外記		右少弁	右馬寮助	京家長者	外記	文章博士	左馬寮	安部晴明	右大臣家々司	右近将監	式部省官人・文章博士等	免給記事	式部省	式部大輔・權大輔		式部大輔	神祇官	僧綱	一被処罰者
			免給記事					免給記事							3月4日免	④7同一記事	停釐務、安和元・9・14預釐務	6月過状進		備 考

表II 怠状・過状(④5)~(④8)

表II 怠状・過状(65)~(83)

番号	出典	年月日	処罰	原因	被処罰者	備考
63	〃	〃 〃 2・7・22	怠状	寮使を勤めず	内蔵権頭	返給記事
62	小	〃 〃 2・7・4	過状	議論の敗者	律師	
61	〃	〃 〃 2・5・13	〃	祭日の過差を糺さず	検非違使	5月16日返給
60	世	〃 〃 2・5・13	怠状	寮使を勤めず	内蔵権頭	御堂関白記同日条は奏覽。 7月22日返給(世)
79	〃	〃 〃 2・3・10	〃	手結に奉仕せず	衛府案主	
78	小	〃 〃 2・2・29	〃	大原野祭舞人装束違例	近衛将監	
77	〃	〃 〃 2・正・26	過状	省試評定文を摺消す	式部録	
76	〃	〃 〃 長和元・12・5	怠状	暴行狼籍	侍人	
75	〃	〃 〃 寛弘8・9・14	〃	穢を他家に及ぼす	(加賀守)	小右記9月18日怠状返給
74	〃	〃 〃 7・9・15	過状	大原野社付近の穢を見すこす	右衛門府生	
73	〃	〃 〃 7・6・1	怠状	諸陣直三度欠怠		
72	〃	〃 〃 6・12・23	〃	正税減省勘文に過誤あり		
71	御	〃 〃 6・7・25	〃			
70	権	〃 〃 4・11・17	過状		彈正忠	
69	権・紀	〃 〃 2・9・6	〃		検非違使・右衛門少志	官職解却。後優免
68	権	〃 〃 2・5・11	怠状		左兵衛尉	
67	権・御	〃 〃 元・4・28	過状		宇佐権大官司	66と同一内容
66	紀	〃 〃 元・4・10	怠状		宇佐宮神人	
65	御	寛弘元・2・22	怠状	新任官人の饗祿甚しき	右衛門尉	23日条

表II 怠状・過状(103)~(112)

番号	出典	年月日	怠状・過状	処罰	原因	被処罰者	備考
103	小	万寿元・正・17	怠状	射礼の日陣直欠怠	左右衛門官人		
104	〃	〃元・4・11	過状	忌日不参	檢非違使		
105	〃	〃2・7・21	〃	直物誤記	史生		勘当・返給
106	左	〃3・5・2	怠状		檢非違使		大将以下連署
107	小	〃3・7・30	過状	相撲使を勤めず	近衛將曹		
108	〃	〃4・正・13	〃	犯人逮捕を怠る	檢非違使		
109	〃	〃4・正・16	〃	踏歌供御膳に欠怠	大外記・内膳奉膳・采女正		
110	〃	〃4・7・25	〃	雷鳴の日不参	將曹・府生		26日免勤事
111	〃	〃4・7・27	〃	相撲人不参	相撲所官人(近衛將監・將曹・府生)		
112	〃	長元元・8・15	〃	犯人追捕途上で帰京	檢非違使		
113	小・左	〃元・11・29	〃	勘文失錯	明法博士		12月20日会赦
114	小	〃2・閏2・6	〃	逮捕凌轢	檢非違使		
115	〃	〃2・9・23	〃	松尾・梅宮祭違失	供奉所司		原免記事
116	〃	〃4・2・2	怠状		兵庫寮官人		
117	〃	〃4・3・28	過状	右馬寮の馬疲劣	右馬頭		
118	〃	〃4・8・4	〃	託宣の疑義	伊勢斎王		
119	〃	〃4・8・5	〃	追相撲狼籍、相撲所定之遅給	近衛將監・府生		免給記事
120	〃	〃4・8・12	〃	太政官符発給遅延	官掌		9月8日免
121	左	〃7・7・8	怠状	賑給懈怠	左右衛門俗・法家官人		5月以来怠状免給せず